ISO LEAD ASSESSOR (主任審査員)

養成トレーニングに出席するの記

小佐　美智子

１９９２年１１月、私はこの講座に出席するため一週間東京へ行った。でも、主任審査員になるためではない。トレーニングの講師として来日する二人の英国人（ジョンとナイジェル）の書類の世話や個人的なアシスタントとして（つまり仕事で）出席したのである。

この研修は ISO 9000 シリーズ（9001-4）を使って企業を審査する主任審査員の養成講座である。審査員は英国の国家機関に登録され、ISO の規格にもとづいて企業の格づけをする重要な仕事である。従って、研修生の人達は越えなければならない幾つかのハードルがあるが、その先ず第一歩がこの研修であった。

今、日本では多くの製造工場で、ISO の認可を受けようと努力していられるそうである。というのも、EC などでは現在、ISO の品質審査規格に当てはまる工場からの製品を優先して購入するようになってきているからである。それらの工場を審査する審査員や検査機関は、ISO の機関から承認されていなければならない。規格書さえあれば誰でもが審査できるものではない。そして厄介なことに、日本ではこの審査員があまりいないとのことである。分野にもよるだろうが、私が仕事の依頼を受けたこの公的な検査協会は化学の分野が専門で、ここでもご他聞にもれず、殆ど皆無の状態だとか。だから、一日も早くとの気持ちから、研修を受ける研修生の方々も非常に熱心であった。研修生と言っても皆さんは部長や課長の肩書きを持った人達ばかりである。そんな方々が実に真剣に勉強に取り組んでいられ、私は只感心ばかりしていた。

ISO 9000 シリーズは BS5750 に端を発している英国国家規格であり、製品のメーカーやサプライヤーの評価をする物差しとなる規格である。製品そのものではなく、当該会社の内容を審査するものである。この研修は必須項目であるといっても、この方々が全員英国へいって研修を受けるなどということは不可能である。そこで、英国にある研修機関との交渉がはじまったのであるが、その一連の書簡の翻訳を依頼されたのが、この協会とのそもそもの縁の始まりであった。かなりの書簡の往復の後、やっと先方もこの異例の研修の実施をみとめてくれ、通訳つきでの研修となったのである。国家規格にもとづいて審査をする審査員をこうして養成する専門の機関までがあったとはさすが、と感

心した。

講師の二人もさすが英国紳士である。講習の内容に、「審査のために企業を訪問する際も、決して相手の会社から過分の供応をうけないこと。」という意味の箇所があるが、この人たちは、自らそれを実戦していられた。だから、協会側から、通勤のために車をまわしますと申し出があったとしてもそれを断り、墨田区にあるこの協会の事務所まで地下鉄と電車で通うこととなった。浅草にある同じホテルに投宿している私も同行し、三人での電車通勤がはじまった。

ISO 9000 シリーズはおもに、工場などの品質管理システムについて審査するもので、製品とか、材料のよしあしを判定するものではない。当該工場が、品質管理に関してどんな取組をし、どのように対処しているかを規格に照らし合わせて判定し、合格ならば適合工場と認定するのである。つまり、ハード面ではなく、ソフト面の審査といえるのかも知れない。研修はまず、ISO の歴史から始まり、審査の基準、実技のロールプレーイングと多彩であった。通訳の女性二人も大忙しである。実技のロールプレーイングでは、会社への電話でアポイントをとったり、アプローチの話法、話の進めかたと、部外者の私まで教わるところが多かった。

最後にテストがある。これに受からねばこれから先はない。だから、皆さんは非常に熱心である。テストの問題は私が和訳した。解答は勿論日本語。後でまた、英訳しなおして送る手筈になっている。

一週間の研修もあと一日を残すばかりという金曜日の夕方、さよならパーテイが浅草のあるレストランで行われた。宴もたけなわになった頃、カラオケセットが持ち出された。皆さんの歌を聴いて楽しんでいると、進行係の I 課長がいきなり、私を指名された。そんなの聞いてないよ、といってみても、もう曲のイントロは始まっている。なんと、曲はその昔流行したパテイ・ページの「テネシー・ワルツ」、ややウエスタン調の入ったこのラブソングはあまりにも有名である。カラオケセットに入っている英語の曲は非常に数少ないから、選り好みできないし、まあ、笑って頂こうと私も覚悟を決めて歌った。それにしても、この曲でよかった、私はその昔はポップスフアンで、流行歌とか演歌は全く知らなかったので、その手の歌だったら絶対に歌えなかったことだろう。でも、出来れば、「スターダスト」くらいがよかったかな、などと思った。ジョンとナイジェルにはあのビートルズの「イエスタデイ」。”Never tried in my life.”とか言いながら、二人ともすごく上手い。私も急に歌いたくなり、彼らの側にいって、一緒に“Why she had to go, I don’t know she wouldn’t stay…”と繰り返し気分よく歌った。最後の曲は、全員で、カラオケなしで(つまり、アカペラで)蛍の光(Auld

lang syne)を日英混合で合唱してお開きとなった。

家に持ち帰った１２名分のテスト解答用紙はA4の用紙で優に１００枚を越すくらいの量であり、内容からしても翻訳するには非常に苦労した。東京滞在中は大した仕事もせずにいたが、この最後の締めくくりともいうべきテストの翻訳は責任も重く、かなりのプレッシャーがかかった。私にしては珍しいくらい真剣に取り組んだが、この時になってはじめて、何故一週間もの間、のんびりと東京に滞在させてもらったかの訳がわかった。先方は私にも勉強して欲しかったのだ　一最後のこの翻訳のために。今頃になってそれに気がついてももう遅い、と自嘲しながら、私は自分を鞭うつしかなかった。窓の外に見える通りの立木はこの私の心を表すかのように、師走の風に寒々とゆれていた。

1993年が明けて暫くたった頃、協会の担当のT部長から、１２名全員がテストに合格された旨の連絡を受けた。私としてはただ雇われただけの翻訳者で、協会としては、私にまで連絡なさらねばならない義理はないのであるが、一週間も一緒に机を並べて座っていたよしみからか部長は親切である。ジョンからの手紙もFAXで転送してくださった。最後の箇所に、「very hard working Kosa-sanによろしく。機会があれば、また、一緒に仕事をしたいとお伝えください。」との意味の言葉があった。非常に気位の高い紳士で、時には近寄りがたい一面もあるジョン、ややのんびりとして、にこやかな笑みをたたえていた青年ナイジェル、二人ともとてもいい人達である。

その後、研修生の皆さんはどうされたのだろう。いま頃はインターンを終わり、英国の協会に登録された立派な主任審査員になっていられると思う。そして、多方面に活躍していられるのではなかろうか。心からご活躍をお祈りしたい気持ちでいる。